

# つまるどころ文天祥は何のために死んだのか？

——文天祥研究の課題と展望——

近藤一成

はじめに

状元宰相として抗元活動に身を投じ、最後まで世祖フビライに屈服することなく、刑場の露と消えた文天祥への賛辞は、刑死直後から今に至るまで絶えることがない。近年の本格的評伝である俞兆鵬・俞暉『文天祥研究』（南宋史研究叢書 二〇〇八年人民出版社以下『研究』と略称）も、その書き出しは「南宋末の愛国志士であり民族英雄として、その輝かしい姿は史書に光彩を放っている。かれの人生、古より誰か死なからん、丹心を留取し汗青を照らさん」の句は津々浦々まで知れわたり、その高尚な道徳と忠貞の気骨は長く我が国諸民族人民の敬慕と称賛を受け続けてきた」の記述で始まる。

元の順帝即位の元統元年（一二三三）十二月、参議中書省相臺許有壬は文天祥の孫である富が上梓した劉岳申撰「文丞相傳」（以下、

劉「伝」と略す）に序を寄せ、その文を「宋の士を養うこと三百年、人を得るの盛んなること唐漢を軼え、これを過ぐるに遠し」と始める。幾多の忠賢が輩出したが、天命が（宋から）去り、人心が既に離れた後に、「君臣大義の廢すべからず、人心天理の未だ嘗て泯びざる」を後世に知らしめた名教上の功績は評価しきれないと続け、「宋の亡ぶや、節を守り屈せざる者、之れ有り。而るに未だ有為なること公の如き者有らず。事、固より成敗を以つて論ずべからず。然らば則ち宋三百年の功を収むる者は公一人のみ」と結論づける。

この序文は、劉岳申の傳贊に対応した叙述である。劉は文天祥の生涯に独特の解釈を施して大略次のように述べる。賈似道、留夢炎は当然としても、宋朝存続のために戦った陳宜中、張世傑も天祥を避けたのはなぜであろうか。黄萬石が嫉んだのはなぜか。（揚州で元軍と死闘をしていた）李庭芝が天祥を殺そうとしたのはなぜか。：（大都に拉致される途中）京口で脱出し、真州、揚州に走り（入られず）、真・揚を脱出し三山（福州）に至り萬死を逃れた。潮

つまるどころ文天祥は何のために死んだのか？

陽で元軍に捕らわれたとき毒を仰いだが死なず、連行される途次、南安で絶食したが死なず、(苛烈な)燕の獄(の三年余り)でも死ななかつたのはなぜか。それは「殆ど天の丞相を以つて宋三百年の士を待するの厚きに報じ、且つ世教を昌らかにするを以つてなり」という。天祥が刑死した日は、宋が(皇帝の退位で)亡びてから七年、崖山で宋軍が亡びてからでも五年(が経つ)と、王朝の興亡とは関連しない、その死の独自の意義を強調している。あたかも文天祥の人生は、刑死するためにあつたかのように。

『宋史』四一八 文天祥傳の論は、最後に「宋三百餘年、取士の科進士より盛んなるはなし。進士は倫魁より盛んなるはなし。天祥の死自り、世の高論を為すを好む者、科目は以つて偉人を得るに足らずと謂うは、豈其れ然らんや」の言葉で結ぶ。取士、養士は宋朝体制を維持する根幹の機能であり、元人にとつて宋朝といえは士大夫官僚であり、その宋朝士大夫の総決算が文天祥であつた。

文天祥の死を歴史上にどう位置づけるかは、当然、時代によって異なってくる。小論は、状元宰相として仁・義を全うしたと自他ともに認めるその死を、当時の歴史的文脈にそつて再検討するものである。

## 一 官歴

文天祥(一一三六・一一八二)、字は履善、科挙合格後は宋瑞、

号は文山。南宋理宗の端平三年、江西路吉州廬陵県に生まれる。父の儀は読書を好む人であつたが本人を含め代々官僚を出した形跡はない。二十一歳、宝祐四年(一二五六)に状元で進士及第、直後の父の死で廬陵にて服喪。喪が明けて出仕するが、モンゴル軍の南宋攻略が本格化するなかで遷都論を唱える一派に反論、宦官董宋臣を斬つた上で人心を一つにして実施すべき四策を提言し、受け入れられず、直ちに帰郷した。

天祥が就いた内外の官職は多いが、着任し職務を遂行した期間は総計しても長くはない。実質最初の仕事は景定二年(一二六一)十月からの秘書省正字であり、経籍の校勘などを職務とするこの官は状元及第者が次回の殿試合格者発表後に与えられる慣例となつており「対花召」とよばれた。翌三年四月からは景献府教授<sup>(1)</sup>を兼ね五月に殿試考官を務めた。同四年正月に官位は著作郎に上がり、二月には激職の刑部郎官に移つた。しかし八月に再び入内内侍省都知(紀年録)、『宋史』四六九などは同押班とする。景献太子府事を兼任した)に戻つた董宋臣を批判して知瑞州(江西路もとの筠州)に転出させられる。景定三年が閏年であつたため、この間、臨安で勤務した一年十一月は、文天祥が同一地点で活動した最長期間である。

瑞州には景定四年十一月に着任するものの、翌五年十月、臨安に呼び戻され十一月に江西提刑使に転じた。この間、十月に理宗が世を去り皇太子であつた度宗が即位している。後世、凡庸で酒色に溺れ賈似道の専権を許したと評される皇帝である。咸淳元年(一二六

五) 二月に瑞州で後任者と事務引き継ぎを行い、提刑として管内を巡回中、四月に吉州で祖母の死に会い、そのまま服喪した。咸淳三年(一二六七) 十二月に一旦中央に戻るものの、翌年正月には弾劾を受け郷里に帰っている。五年(一二六九) 十一月から知寧国府を約一ヶ月、その後、同六年に軍器監兼崇政殿説書などの中央官を半年余り務めて再び弾劾を受けて帰郷、二年半ほどを故郷で過ごした。同九年(一二七三) 三月から湖南提刑使として赴いた衡州で翌十年一月まで刑獄に携わった十一ヵ月間と、老母に仕えるという名目で望んだ吉州の南隣りの知贛州を十年三月から務め、翌徳祐元年(一二七五) 四月に江西提刑安撫使として臨安に召見されるまでの一年余りが最後の通常の職務であった。

すでにモンゴル軍は襄陽を陥落させ、建康(今の南京)を抜き、宋廷は極度の緊張状態にあった。天祥の肩書は兵部侍郎、樞工部尚書と上がり、八月、臨安府に着くと浙西江東制置使兼江西安撫大使兼知平江府の命を受け蘇州に赴いた。しかし十一月にモンゴル軍が常州を屠ると朝廷は首都の防衛のために呼び返し、躊躇する天祥が再三の帰還命令に応ずると、蘇州の後任者は三日後に降伏し、都では天祥が蘇州を見捨てたとの噂が広まった。徳祐二年(一二七六) 正月十八日、元軍総大将伯顔は、臨安中心部から東北にわずか一五キロ余りの皋亭山に軍を進め、二十日、急遽、文天祥に右丞相兼樞密使、都督諸路軍馬の肩書が与えられ、伯顔との談判に赴いた。宰相陳宜中が遁走したための代理である。ところが交渉中の二十一日、

左丞相呉堅らが降伏文書を持ってやってきて伯顔に差し出すという事態が起こる。天祥は降伏に激しく抵抗したが、結局、使節とともに大都に連行されることになった。

以上、二十年の官歴から、個々の場面において天祥固有の言動を指摘することはできるにしても、歴史上特段の意義をもつ事項をあげることは難しい。やはり宋滅亡後の文天祥こそ文天祥たる所以なのである。

## 二 忠と孝

ここで、その「大義に殉ず」ることを可能にした前提の一つが状況及第前後の事情にあることを述べておきたい。『寶祐四年登科録』第一人文天祥の項目に「兄弟璧同奏名」という記述がある。この「同奏名」という書き方はほかに見当たらない。兄弟が同時に科挙合格することはあるが、その場合の表現は同年進士、同榜である。弟璧の同奏名とはどういう意味か。<sup>(2)</sup>

文天祥には璧と霆孫二人の弟がいた。三兄弟は寶祐三年(一二五五)の吉州解試に向けて準備を重ねていたが、解試直前になって末弟霆孫が急死してしまふ。十六歳であった。天祥と璧は合格したが、父儀の悲嘆は大きく体調を崩してしまふ。翌年の省試に失意の儀を残しておけず、二人は父を同行して臨安に向かった。二月一日の礼部開榜(合格発表)に二人の名前があり、あとは原則として落第者

を出さない五月八日の殿試を待つだけとなった。ところが殿試の数日前に父儀の容態が急変してしまう。父一人を客舎残し二人で殿試に向かうことはできない。結局、天祥が五月四日の殿試を受け、壁は宿に留まり父の看病をすることになった。このことが後の二人の運命を大きく分けることになる。

五月二十四日、集英殿での殿試放榜唱名において状元文天祥以下六〇一名の名前が読み上げられた。殿試不参加の壁の名前は当然ない。しかしかれは省試合格者であり、その名前は礼部から殿試受験者として上奏されている。何度も省試を受けて合格しない挙人（解試合格者）には、官だけを与え実職につかせない特別枠の殿試があり、それを特奏名という。これに対し正規の受験者が正奏名である。壁は奏名されたが殿試を受験していない、そのために肩書が「同奏名」と表記されたのであろう。

文壁のその後を簡単に記す。<sup>(3)</sup> 寶祐四年の次の殿試がおこなわれた開慶元年、壁は進士を賜り、迪功郎臨安府司戸參軍を授けられた。以降、中央地方の官職を歴任し、臨安開城後、海上に逃がれた南宋亡命政権から与えられた最終の官は権戸部尚書であった。その間、江西から広東で抗元活動をする兄天祥を惠州知事として支えていたが、戦乱の中、二子佛生、<sup>(4)</sup> 道生を喪った天祥から、次子陞を自分の後嗣としたいという書を受け取り諒承している。やがて天祥が元軍に捕らえられ、年が明けて崖山で宋軍が壊滅すると、壁は元に投降し、少中大夫惠州路総管兼府尹を授けられる。その後、累遷して宣

慰廣西分司邕管に至った。元朝の官僚となった壁は、戦禍で疲弊した廣西の民力の回復に努め、文氏一族の救済に奔走した。廬陵に帰ってからは祖先の加封を実現させ、家廟や天祥の祀廟を建て、その遺文を集め刊行に備えた。大徳二年（一二九七）の没。天祥の養子陞は累官して集賢直学士、その子で劉「伝」を上梓した富は温州路・延平路総管を歴任している。

墓誌は、壁が元に投降した部分を「明年（一二七九）丞相、海上に敗れ、公、始めて宗を全うせんと圖る。丞相の北行するに及び、公、始めて入覲す」と記す。墓誌の壁の位置づけは明確で、冒頭「皇元區宇を混一し、忠臣・孝子を一門に得。公と丞相兄弟二人のみ」と述べるように、兄弟は忠と孝を分担したというのである。君臣の大義に殉ずる天祥と宗族の保全を図る壁という見取り図は分かりやすい。これは壁の元朝への投降と仕官を合理化する唯一の方法であろう。この文壁墓誌銘は「文丞相傳」と同じ劉岳申の執筆であるが、その終わりに「集賢直学士の述べる所の家傳」に拠つたと記す。<sup>(5)</sup> 集賢直学士は文壁であろうから、この考えは元に仕官する文氏一族自らの位置づけを示すものといえる。勿論、それは劉も同意しており、銘は「報ずるに忠臣を以つてし、報ずるに孝子を以つてす。猗歟廬陵、盛んなるかな文氏」で結ばれる。とはいえ文壁の投降に反対した文氏もいた。天祥の従孫という文應麟は、天祥兄弟に合流すべく惠州に来ると、壁に城郭を修理し防備を嚴重にするよう進言した。しかし聞き入れられず、元軍を前に壁が投降すると、これを恥じて

二子を連れ東莞（広州）に去ったという。<sup>(6)</sup>では、天祥自身はどう考えていたのであろうか。至元十八年（一二八一）正月、大都の牢獄から養子文陞に与えた書簡が伝わる。<sup>(7)</sup>そこには道生、佛生二子を喪った悲しみが吐露され、なぜ陞を養子にしたのか、その理由を縷々述べた上で、「不孝、後無きを大と爲す」と孟子の言を引く。後継ぎなく社稷に殉ずる身が、不孝の責を免れるには、父革齋の子である自分が、革齋の孫である汝を後嗣とするしかない。しかし汝を面前で教育する機会がなかった。文天祥の子として生きてゆくために六経を修め、とくに春秋を専門とし、聖人の筆削褒貶、軽重内外を学び、身を立て己を行う本とせよ。聖人の志を識ること、これが吾が志を継ぐことだ、と諭す。いわば陞に与えた遺言である。祀りを絶やさず聖人の道を学べという遺書を陞はどう読んだか。かれなりの解釈とその実行が、実父璧と同じ道、すなわち一族繁栄への尽力と元朝への仕官であった。

もう一度、寶祐四年に戻ろう。五月二十四日の集英殿での唱名のあと、合格者はその日のうちに礼部貢院に設けられた期集所に移動する。官服と笏、外出用の席帽を与えられ、三魁（状元、榜眼、探花の上位三人）は乗馬が許される。期集所は状元局とも呼ばれ、状元が主宰して泊まり込みで、一連の合格儀礼次第と合格者のなかから幹事役など各職務の担当者を決めるのである。今回の儀式は六月一日から始まり、七月二十五日に合格者の名前を刻んだ題名碑を礼部貢院に立てることで終了することになった。<sup>(8)</sup>ところが唱名後、父

儀の容態がにわか革まったとの急報があり、天祥は朝廷に休暇と湯薬を申請し、期集所から宿舎にかけつけた。しかし既に薬も受けつけず、死期を悟った儀は、天祥に状元として尽忠報国せよと諭し息を引き取った。享年四十二。朝廷、同榜からの弔慰金、見舞いを受け、兄弟は六月一日、柩を護り故郷を目指して臨安を後にした。こうして今回の一連の合格儀礼は、主役の状元なしという異例のなかで行われたのである。

殿試と父の死、状元の兄と受験を諦め父の看病に従った弟、この忠と孝の分担は、やがて二〇年後の宋朝滅亡に際して二人の立場の違いを際立たせることになる。逆にいえば孝を分担した璧の存在が、心置きなく天祥の忠を全うさせたともいえるのである。

### 三 義と俠客

文天祥は、劉「伝」がいうように何度も死地を脱している。そのときかれを支えた人物やその周りには義士とよばれる人々がいた。本節では、文天祥を取りまく人々について検討する。

徳祐元年（一二七五）正月、元軍渡江の報があり諸路に勤王軍動員の詔が降された。贛州知事であった天祥は、直ちに陳繼周の門をたたき相談をした。<sup>(9)</sup> 繼周は字を碩卿といい寧都（贛州寧都県）の人である。肩書は貢士（郷貢進士）だが軍功があり、既に二十八年間州県を歴任し、そのときは贛州城内に住んでいた。繼周は、地域の

「豪傑の子弟」の動員と起兵の方略を詳しく述べ、息子の太学生逢父とともに昼夜を分かたず義兵の招集や軍糧の調達に奔走した。本人は老齢であったが、それ故郷里の人望も厚く贛州の義士を率いて天祥に従い臨安に向かう。

天祥は、また広東統制方輿を吉州に遣わし兵を招集した。元年二月から六月にかけて天祥には江西提刑、江西安撫使、権兵部侍郎と次々に辞令が降り、その間祖母の死があったが服喪は許されず、七月七日、兵二万を率いて臨安に向かった。この兵について『宋季三朝政要』五 徳祐元年九月の条は、「文天祥、衛に入る。是れより先、四月の間、天祥、兵を贛州に募る。天祥、時に江西提刑爲り。台州杜潛吉・贛千人を將い之れに従う。是に至り、民兵及び峒丁二萬人を將いて京に至る。衣裝器械盡く具わる」という。<sup>(10)</sup> また『紀年録』徳祐元年に付された察院孫嶸叟の上奏に引く天祥自身の申状には、「今已に贛州諸豪を結約し、凡そ溪峒剽悍輕生の徒、悉く已に糾集す」とあり、招集した兵が豪族の子弟や溪峒蛮など少数民族から成る義軍であったことをいう。かれらが衢州に至ると、天祥の名声を嫌った江西制置使黃萬石は、その軍の烏合の衆であることをいい、朝廷に置くべきではないとして、反対方向の隆興府（南昌）に駐留する命が降った。しかし天祥の反論や、衢州に至った義軍は統率がとれ、通過場所で秋毫も犯すことがないとの報告もあり、入京を許された。八月に西湖畔に駐屯し、九月には銭料の支給や名目的ではあるが主だった指揮官に官職の授与も行われている。

先の陳繼周伝は、繼周と義軍のその後について次のように記す。文天祥が元軍との交渉のため北営に遣わされると義兵は解散させられた。繼周父子はかれらを率いて故郷に帰ったが、すでに贛州は「失守」していたという。「失守」は、知事不在あるいは宋の守備崩壊のどちらにも読めるが、恐らく後者であろう。『紀年録』徳祐二年の付記に、正月二十四日、伯顔は鎮撫唐兀兒と宋の趙興相らを遣わして、先に解散させられた文天祥の義兵一万余衆を郷里に帰らせ文榜を給与したとあるので、元軍が臨安を接收した正月二十日以降の占領政策の一環として（証明書となる）布告を支給し帰郷させたのであろう。一方、吉州は二月十五日に権知州周天驥が元軍に降伏している。周は、前年の九月二十七日に天祥の辟召によって隆興府留司の職を与えられていたが、『宋史』四七 瀛國公 十一月十六日の箇所に「転運判官劉槃、隆興を以って降る」とあるので隆興府に着任できたかは疑問であり、そのために権吉州知事に転じていたのであろう。吉州が降伏したことで贛南一帯は元軍の支配下に入ったから、贛州の「失守」は、すでに宋朝治下にはないという意味とされる。繼周は義兵の帰農に尽力して成果をあげたが、南に脱出した廣王が五月に福州で即位し繼周を知南安軍に任ずると、八月二十二日に贛州総管楊子襲によって子逢父とともに殺害された。繼周の次子槃は、やがて元軍から脱出し江西に来た文天祥に合流して戦い、循州潮州の間で死に、また繼周の幼女廉と槃の子英も戦乱のなかで命を落とした。反対に繼周の兄の子逢春は、元軍に降って萬戸となり、

大都に赴いたとき千戸所で文天祥に会っている。天祥は継周の遺事を書き行状を作成、その数日後に刑死した、とある。この継周行状は、残っていない。

王朝が崩壊しその秩序維持の機能が失われたとき、郷里の保全是民間の自衛組織によって担われる。かれらが義兵、義軍として外部からの侵入者に抵抗する事態は中国史上たびたび現れる。南宋の中興は、これら金軍に抵抗する民間軍事力を中央が収斂する過程でもあった。<sup>11</sup> 陳継周が文天祥に詳細を開具したという「閩里豪傑子弟」と「起兵方略」は、南宋中興以来、民間で継承されてきた義兵組織の立ち上げや行動のノ－ハウであったろう。そこで重んじられる価値観は、上下関係よりも横のつながりを可能にする「義」である。次にあげる杜澹は、そうした義で動いた典型的な人物であり、杜澹なくして宋滅亡後の文天祥の存在は考えられない。

杜澹の短い伝は『宋史』四五四 忠義九また、鄧光薦『文丞相督府忠義傳』にある。字は貴卿、号は梅壑。台州天台の人。理宗の淳祐年間の宰相杜範の姪である。若いころは都臨安の游侠であったという。これらの列伝の大部分は、文天祥自身の「指南録」や「集杜詩」の杜澹に関係する記述に拠っているから、以下の叙述は文天祥の杜澹観といってもよい。それらがどのように語られているかみてみよう。

二人の関係は、徳祐二年正月十三日、西湖の畔りで杜澹が天祥に見えたことに始まる。澹は、国家の危急に義兵四千人を集めていた

つまるどころ文天祥は何のために死んだのか？

が、当局は関心を示さなかった。『宋史』本伝は、徳祐元年の勤王の詔に県宰として応えたとするが、どこの県の知事が具体的に記さず、またほかに県宰であったという記述はみえない。いずれにしても、四千の義兵の所属先を探して、前年八月に贛・吉州の義兵を率いて入京し、西湖畔に駐屯していた天祥を訪ねたのであろう。十九日、文天祥は伯顔の軍営への使者となったが、杜澹は行くことに猛反対した。しかし天祥が聞き入れずに出発すると、澹は随従を願った。「指南録」に杜澹を「杜架閣」と書くのは、このとき朝旨があり、官を宣教郎に改め兵部架閣文字の職が与えられたからである。<sup>12</sup> 杜澹の予想通り、降伏の使節到来後、天祥は軍営に抑留される。さらにその二十日後、使節とともに大都燕に連行されるが、杜澹は、多くの親従が逃亡するなか、苦悩する天祥に従うことを決意する。同行はほかに帳前將官余慶元や兵士・従僕ら一〇名、総勢一二名の一団となった。

出発早々、謝村に停泊した深夜、天祥は杜澹と脱出を図るが、劉百戸が部下二、三〇人を連れて巡邏するのに遭い断念。平江(蘇州)でも脱出はかなわず、その機会は一行が京口(鎮江)に停泊していたときによく訪れる。天祥と杜澹は、失敗したときの死を覚悟し、長江を渡り未だ宋軍が死守していた真州に向かう脱出行を決意した。天祥はこのとき自決用の匕首を準備している。真州人である余元慶が舟を手配し、鎮江郊外の長江岸辺にある甘露寺の下を待ち合わせの場所とした。問題は、元軍の監視の目からどうやって逃れ

るかである。夜の闇にまぎれ人通りの少ない間道を通り甘露寺に至るには土地の道案内人がどうしても必要である。

天祥が「杜架閣は、まるで狂人のようだ。街に出ては飲み歩き、たまたま本朝のありさまを悲憤慷慨する人物に会うと、すぐ金を渡し、秘密だと言って計画を打ち明けては、舟が調達できずに終わる。こうしたことを十数回繰り返し、いつ計画が漏れいするか気が気ではなかった」というように、杜澥の行動は「状元宰相」文天祥の理解を超えていた。

二月十八日に鎮江に至ってからの杜澥の工作活動によって、決行は二十九日となる。杜澥は、連日、共に飲むことで親しくなった「真州老校」を三百両の報酬で道案内人とした。鎮江には城壁がなく、通りは狭く江岸まで一〇里あるが、間道を通ったので僅か数プロックを抜けただけで人家のない野原に出た。もしこの老校を得られなければ市街を行かねばならず脱出はできなかったであろう、と述懐している<sup>(13)</sup>。当夜は決行時に老校が酔って寝込んでしまい、老妻に詰問されるといふ失敗もあったが、杜澥の機転で窮地を逃れた。

文天祥らは鎮江滞在中、運河沿いの沈頤の家に寝泊まりしていた。監視の王千戸は片時も離れることがない。あるとき一將校がやって来た。何者かと問うと劉百戸と答え夜禁の担当だという。何の仕事かと問うと、官燈を照らし往來の便とするという。杜澥はこれを聞くとも早速かれに接近し、よしみを強要して遂には約して兄弟となった。当日は妓館に連れ出し、さんざん飲ませて泊るように仕向けて

から、これから文丞相を送らねばならないが夜禁が心配だということ、劉は俺の官燈を使え、小者に持たせ行かせると、問題ないと答える。

こうして約束通り、小者が官燈をもつてくると、沈家の主人と王千戸を酔いつぶしていた天祥は衣服を変え、杜澥について行く。途中、誰何されることもなく街を出ると、杜澥は小者に銀を与え帰した。

無事、京口を脱出した天祥一行だが、たどりついた真州城から二日後に放り出され、揚州でも入城するどころか殺害される恐怖に怯える。揚州に拠る制置使李庭芝が、文天祥一行は元軍に内通する偽物なので抹殺せよという情報が流したからだという。この間、余元慶ら四人が逃亡し、元軍が横行するなか絶体絶命の窮地に陥る。そのなかで、杜澥の示した、ここで死ぬのは無益であり、高郵に出た通州から渡海して江南に帰り、二王に合流するという方針に従い天祥は逃避行を続けた。途中、元軍の騎馬二十余騎に遭遇して一人が拉致され二人が負傷、一人は病死、艱難辛苦、万死に一生を得て、徳祐二年閏三月十七日、天祥以下六名が通州から船で台州に向かった。

文天祥は、台州に向かう船のなかで、杜澥についてこう記している。「貴卿と余は患難を共にす。二月晦自り今日に至るまで死と鄰り爲らざるの日なし。平正の交遊、目を擧ぐれば何くにか在る。貴卿、真に吾が異姓の兄弟なり」(「指南録」三「貴卿」)。また大都の獄中で「司農卿、廣東提舉招討副使、都督府謀官杜澥、字は貴卿、丞相互齋の姪なり。性は剛猛、京師に游俠爲り。予の北行するや、澥、

従うを願う。鎮江の脱するは、諍の力なり。淮甸を匍匐し、艱虞を衛護し、忠勞備え盡くす、嗚呼、義士と謂うべし」〔集杜詩〕杜大卿諍第一三二。天祥は、游侠であり、義士である杜諍とは異姓兄弟、すなわち義兄弟とまでいう。確かに杜諍なくして京口からの脱出はあり得なかつたであろう。とすれば天祥が大義名分に殉ずるための橋渡しとして、游侠の義の世界が必要であつたことになる。

二王に合流した杜諍は、天祥とともに抗元活動に従事する。天祥が潮陽に移るときに分かれ、海路厓山に向かつた。五坡嶺で捕らわれ広州五羊に置かれた天祥の前に、厓山で捕虜となつた杜諍が現れた。そのときのありさまを天祥は「…余、五羊に至る。諍來り見ゆ。病にて復た人形無し。虜の網羅中に在り、力を容る所無し、尋いで死を聞く、哀しい哉」〔杜詩集〕杜大卿諍一三三〕と回顧している。

#### 四 元人との対話

文天祥は、先述したように徳祐二年正月二十日、講和使節として皋亭山の元軍総司令官伯顔軍營に赴き交渉を申し入れた。ここでの丞相伯顔、総管峻都との対話を始めとし、捕虜後は元帥張弘範、丞相博羅、世祖フビライと元側との一連の遣り取りが記録されている。それらの大部分は天祥自身の記述なので、元側の対応といつてもあくまで天祥がそう理解したというレベルにとどまるが、少なくとも天祥の主張は本人の考えである。以下、その遣り取りを簡単に紹介

し、天祥の主張を確認する。まず「指南録」一 紀事六首 からみよう。

伯顔に対し天祥は、「前の宰相（陳宜中ら）との経緯については与り知るところではない。今、大皇（謝太后）は自分を宰相としたが辞退し、まず講和の件でここに来た」と述べる。但しすぐ後で、丞相の資格で交渉していると自らいつている。伯顔は「丞相（文天祥）が、（国の）大事を担っているのは、その通りである」と応じた。天祥は「本朝は帝王の正統を承け、衣冠礼楽の在るところである。北朝（元）は（宋）国の存続を望むのか、それとも社稷を毀とうと望むのか」と畳み掛ける。伯顔は世祖の詔を出して解説し「社稷はそのまま、百姓は殺さない」と述べる。天祥「爾、前後に吾が使に約束したが、信を失うことが多かつた。今、両国の丞相が親しく盟約を定め、（そのためには）まず兵を平江（蘇州）あるいは嘉興に退げるべきである。（盟約の）内容が北朝に伝わるのを待ち、どのように対処するかをみる。そこでさらに議論を続けよう」。天祥は、当時、元軍がすでに京城に迫り、危急を緩めるためには、ただ北と誼を通じ、後計を図るしかなかったもので、このような提案をしたのだと状況を説明し、伯顔を激しく論難して、もし自分の提案のようであれば、両国は大變うまくゆく。そうでなければ南北の戦禍は止まず、爾の利とはならない、と述べる。しかし北の言辞はだんだん不遜となつたので「吾は南朝の状元宰相たり。ただ一死報国を欠くだけであり、刀鋸鼎鑊は懼れるところではない」といわば啖呵を切

ると、伯顔は言葉に窮したが、怒る勇氣はなかった。居並ぶ將軍たちは互いに見合い顔色を変え、自分を「丈夫」と称えた。その晩の將軍たちの軍議は長く、突然、自分は軍營に拘留された。当時は北がこれほどまでの無礼はしれないと思っていた。自分が拘束されると、次に賈餘慶を迎え入れられ、こうして（自分が担った講和という）国事は収拾できなかつた。なんとということか。<sup>(14)</sup>

多少補いながら意識すれば「指南録」の記述は以上のようなになる。劉「伝」の該当箇所は、文語文として表現が簡潔となり、状況説明を補足するが内容は同じである。「指南録」は、別項で降伏した賈餘慶や投降した將軍呂文煥らを痛罵し、売国の罪を責め、天祥の宋朝維持の熱い想いを際立たせる。では伯顔の対応を伝える『元史』  
一二七 伯顔伝にはどのように記されているであろうか。

丙戌（正月二十日）、軍士に禁じ入城すること母れ、と。呂文煥を遣わし黄榜を持って臨安中外の軍民に諭し、安堵すること故の如からしむ。是より先、三衛の衛士、白晝人を殺し、閭里の小民、亂に乗じ剽掠す。是に至り民皆な之れに安んず。丁亥（二十一日）、程鵬飛・洪雙壽等を遣わし宮に入り、謝后を慰諭せしむ。戊子（二十二日）、謝后、丞相吳堅・文天祥、樞密謝堂、安撫賈餘慶、内官鄧惟善を遣わし、來り見ゆ。伯顔、慰して之れを遣す。<sup>(15)</sup> 天祥を顧みるに舉動常ならず。異志有るを疑い、之れを軍中に留む。天祥數し歸すを請うも、伯顔笑いて答えず。天祥怒りて曰く「我、此れに來たるは兩國の大事の爲なり。彼

皆な遣歸す。何故に我を留むや」と。伯顔曰く「怒る勿れ。汝は宋の大臣爲り。責任輕からず。今日の事、政當に我と之れを共にせん」と。忙古歹・唆都をに令して館伴し之れを羈縻せしむ。

文天祥が伯顔陣營に赴いた二十日には、すでに事態が急速に動いていたことが分かる。伯顔は、前年の十二月に、宋側の元と宋両皇帝の關係を伯姪にし、歳幣銀二十五万両、絹二十五万匹を送るという具体的条件を示しての講和申し込みを一蹴している。この時点で謝后側は降伏を決断し「納降表」を学士院に執筆させた。<sup>(16)</sup> 正月九日には宰相陳宜中が監察御史劉岳を伯顔に遣わし、伯姪ではなく臣下となることを打診している（『宋史』四七は正月五日）。文天祥が、陳宜中による交渉の経緯について「与り知らない」といったのは、これらの経過を指してのことで、自分の提言は独自のものだと言いつたのであろう。天祥の「紀年録」は、この間の動きを、十八日、伯顔が梟亭山に至り、夕刻、宜中が逃亡、十九日、元の軍營に行く命が降り、二十日、軍營で伯顔と論争、抑留され、二十一日、宰相吳堅以下が降伏、と記している。一方、上掲『宋史』『元史』ともに十八日には宋朝が伝国の璽および降表を奉じ軍營に至つたと明記する。使者について『宋史』が監察御史楊應奎、『元史』が知臨安府賈餘慶ほか宋室二名と人物は異なるが、これを受けた伯顔は、囊加歹を臨安に帰る賈餘慶に同行させ、宋の宰臣を召して降伏を協議することを伝えた。宋側は、十九日、陳宜中が逃亡したので文天祥

を代わりにすることにし、右丞相とした。天祥は官を拝さなかったが、二十日、宰相呉堅とともに軍營に向かう。このように天祥の軍營派遣は、すでに決まった降伏の一連の協議過程の一コマに過ぎなかった。朝廷は、なぜ降伏に絶対反対するであろう文天祥を敢えて降伏使節の一員に加えたのか。また十八日には陳宜中の逃亡と前後して二王皇・昺を擁して駙馬都尉楊鎮らが、また武將張世傑、宗正少卿陸秀夫らが臨安を離れている。文天祥はなぜそれらに加わらなかったのか。あるいは加えて貰えなかったのか、一連の流れのなかで宋廷降伏派の思惑は、解明すべき今後の課題である。いずれにしても『元史』において、伯顔の文天祥に対する態度は、適当にあしらうといっちはいい過ぎであろうが、降伏をめぐる真剣な交渉相手として認めていなかったことは確かである。

文天祥の監視役となった唆都との会話が「指南録」一 唆都に残されている。「唆都がいうには、大元は学校を興し、科擧を立てようとしている。丞相は大宋に在って状元宰相である。今から大元の宰相となることは疑いない。丞相がいつも言う、国存すれば国と與にし、国亡びれば国と與にするは、まさに男子の心であるけれど、天下は統一された。大元の宰相はどのようにするのか。国亡與亡の四字は言うのをやめよ、と。自分は哭して拒んだ。唆都は常に予が節に殉ずることを恐れている」と。『元史』一二九の唆都伝にこの会話は出てこないが、やがて元側が言い出す「仕官すれば丞相にする」という話しの初出である。固より唆都にその権限はないが、天

祥の監視役として、自殺されることを恐れていたことは疑いないであろう。

その後、景炎三年（至元十五年 一二七八）十二月、元軍の捕囚となった文天祥は毒薬をあおったが死に切れず、蒙古漢軍都元帥張弘範のもとに置かれる。『元史』一五六 張弘範伝は、「宋丞相文天祥を五坡嶺に獲え、之れを拜せしむるも屈せず。弘範、之れを義とし、待するに賓禮を以つてす」と記す。劉岳申はもう少し詳しく「弘範、必ず禮を以つて見えんと欲し、相見の禮を議す。天祥曰、吾れ跪く能わず。吾れ嘗て伯顔・阿朮に見えるも惟だ長揖するのみ。或るひと曰く、奈何ぞ拜せざらんや、と。天祥曰く、吾死する能うも、拜する能わず。弘範も亦た強いる能わず。遂に長揖を以つて相見ゆ」と拝礼を拒否し、弘範もそれを認めている。天祥にとり、屈服しないという態度を貫くことが先ず大事であった。

翌祥興元年（至元十六年）正月二日、張弘範は天祥を連れて船に乗り厓山へと向かう。十三日、弘範は天祥に、厓山に集結している宋軍の総大將張世傑に降伏勸告書を書くように命ずる。これに対し天祥は「我れ自ら父母を救わんとして得ざるに、乃ち人をして父母に背かしむること可ならんか」と答え、代わりに詩を書いて示した。これが末尾の「人生、古より誰か死なからん、丹心を留取し汗青を照らさん」の句で有名な「過零丁洋」である。天祥は、これを読んだ弘範が「好人好詩」と称え、降伏勸告書の執筆を強制しなかったと書き、劉「伝」は「弘範、笑いて之れを置く」と記す。いずれに

つまるどころか文天祥は何のために死んだのか？

しても天祥が捕虜になった時点で、弘範は「客禮」（「紀年録」）を以って遇し、その態度は変わることはなかった。厓山沖の船から宋軍壊滅の始終を目の当たりにした天祥にとり、残された唯一の道「死」の意味を明確に方向づけたのは、天祥を評価する弘範との対話であった。

三月十四日<sup>(16)</sup>、広州に戻った弘範は、將軍たちを集めて宴を開く。酒杯を挙げ、おもむろに天祥にいう「国は亡びた。忠孝の事は尽した。丞相は心を改め考えを変え、大宋に仕えたように大元に仕えよ。大元の賢相は、丞相に非ずして誰ができません。」天祥は涙していう「国亡ぶも救うことができず、人臣として死んでもまだ余罪がある。いわんや敢えてその死から逃がれ、その心を二つにすることができらるらうか。」弘範はまたいう「国が亡び、そこで死んだなら、誰が復たこのことを書くのか。」天祥がいう「商が亡びて（伯）夷（叔）斉が周の粟を食まざるは、また自らその心を尽くすのみだからである。どうして書すと書さざるを論ずるのか。」弘範は姿勢を正した。ここに元に仕えるか、宋に殉じて死ぬか、その二者択一がより鮮明となったのである。

このときのもう一つの場面を劉「伝」は描く。副元帥の龐鈔児赤なる者が天祥に酒を注いだが、天祥は礼を為さなかった。龐鈔児赤は怒って天祥を罵倒し、天祥も罵倒し返し、速やかなる死を請うた、ことである。些細な事件とはいえ、張弘範とモンゴル軍将の天祥に対する態度の違いは際立つ。河北易州出身の漢人世侯張柔の息子で

ある弘範は、士大夫官僚の価値観を理解する立場にあったのである。『元史』本伝には、天祥を捕らえた記事の後に「宋禮部侍郎鄧光薦を獲る。子の珪に命じ之れに事えせしむ」とあり、鄧光薦は後に中書平章政事にまでなる張珪に、一編の書「相業」を撰し贈った。弘範は世祖に、天祥がどうしても屈服しないこと、及びそのかれを殺さない理由を上奏し、天祥を京師に護送せよとの命を承った。

大都に送られた天祥は、尋問する博羅丞相<sup>(17)</sup>と通訳を介して長い遣り取りをしている。「紀年録」に記した内容は、①いつもの跪拜か長揖かの争い。今回は左右が強引に跪拜の形を作らせた。②王朝の興亡は常であり、亡国の宰相の取るべき態度を述べ、宋の宰相として国が亡びれば自分も死ぬべきであると主張する。③博羅が興亡の歴史の説明を求めたことに、十七史の解説をさせるのか、ここは博学宏詞科の試験場ではないと色めきたったことを記す。④宋の賊臣が国を献じた後、二王と老母の存在が自分の死を止めているとの天祥の言葉を受け、博羅が、君主である徳祐帝（恭帝）を棄て、二王を立てるのは忠臣とはいえないと詰問。それに対し、国を失ったあとは、社稷は重く君は軽いことから、社稷宗廟の計によって新たな君主を立てたと反論する。⑤ここで尋問者のなかから新たに恐らく漢人一人と張平章が発言する。兩人とも二王即位の正統性を疑い、即位は篡奪ではないかと問題視した。天祥は徳祐は退位しているから篡奪ではないとし、手続き的には度宗の子、徳祐の兄弟であり、太皇太后の言葉に拠っているので「受命」でないとはいえない、と

反論したが、元側は納得しない様子である。⑥博羅は、すでにすべてが終わっているのに、何をしても無駄だというのが、天祥は、人臣は君に仕え、子は父に仕える、父が病で為すすべがないからといって、どうして薬を投じないことがあろうか、救えないのは天命である、ここに至れば天祥は死ぬだけであると主張し、怒った博羅は、おまえは死にたいというが、俺はすぐには死なせない、牢屋にぶちこんでやる、と感情的になる。天祥は、自分は義で死ぬのであるから収禁など関係ない、と返せば、博羅はますます激昂し、通訳はもはや伝えなくなった、とある。

元人との対話の最後は、至元十九年（一二八二）十二月八日の世祖フビライとの問答である。文天祥自身の記録はなく、経緯は、劉「伝」や「紀年録」に付された鄧光薦「文丞相傳」にみえる。世祖は、天祥が宋に仕えたように元に仕えれば中書宰相の座を用意するといひ、天祥は今までと同じく死を願ったという内容で、先の張弘範との問答の再現である。世宗は弘範の上奏に従ったのであろう。この対話が事実であったかどうかは別にして、元朝皇帝との遣り取りで、文天祥と元朝との交渉は最終的に完結したことになる。

文天祥が後世に伝えるために自らの言動を回顧して記した個人的な記録である「指南録」「紀年録」と、元朝の正史として編纂された『元史』の記述を同列に置くことはできない。それはどちらがより事実に近いとか、より正しいかという問題ではなく、どういう視点と視野から文天祥が記録されたかという問題である。これはす

なわち文天祥の言動を検討するわれわれの問題につながる。伯顔にしろ博羅にしろ、元朝の非漢人武将が天祥の主張を理解したようには思えない。かれらにとつて文天祥問題は、元軍平宋過程の一コマに過ぎなかつたからである。後世の、宋代士大夫の総決算である文天祥という評価が確立するためには、文天祥側の記録の伝達が必須であつた。

### 結びにかえて

科挙の状元合格から始まる文天祥の生涯は、すべてが状元宰相としての刑死に収斂してゆく受難物語のようである。しかし、文天祥の殉節を可能にするには、単純に忠君愛国の強い想いだけでは十分でない。小論は、当時の士大夫にとって欠かすことのできない孝の問題、また中国史の基層に流通する任侠の義が刑死の成就には必要であつたことを指摘してみた。そしてもう一つ重要な課題として、文天祥の言動がいかに記録され、伝わったのかという問題が残されていることがあるのだが、すでに紙数も尽きた。詳細は別に考えることとして、ここでは二、三の論点を提示し結びに代える。

今までみてきたように、文天祥の言動を知る基本史料は、かれの文集に収録された本人の著作である。とくに「指南録」「紀年録」「集杜詩」は、伯顔陣営に赴いてからの行動を詳細に伝える。問題はそれらが通常の著作環境で書かれたものではないことである。「指南

録」自序は、徳祐二年（一二七六）閏三月十七日、通州から海に浮かび三十日に台州に至る船中で記したといい、「指南後録」は、「紀年録」「集杜詩」とともに獄中記である。それらはどのような経緯で獄外に持ち出され「文集」に収録されたのか。そもそも「文集」の編纂はいつ誰が行ったのか。宋元交替の混乱期をくぐり抜け、上梓にいたるまでの過程が今までの研究では十分明らかでない。『研究』は当然この問題に触れているが、「文集」諸版本の考察については詳しいが、今は伝わらない元版と、その編纂過程は依然不明である。大都では早くから文天祥の詩集が『吟嘯集』として刊行されたという。獄中著作を収集し、「文集」編纂に尽力したのは弟の壁であり、養子の陞とその子の富が最初の『道体堂本』刊行に関係したことは容易に推測される。これら文天祥研究の基礎となる史料学が、今後の緊急の課題である。<sup>(18)</sup>

## 注

- (1) 南宋末臨安に置かれていた八王府の一つ、宮城南西鄰の鐵冶嶺に在る。『咸淳臨安志』十諸王府参照。寧宗のときの皇太子詢は、諡が景獻。嘉定十三年二十九歳で薨じた。子についての記録は未見であるが、恐らく景獻王府は継がれていたであろう。『宋史』二四六宗室三参照。
- (2) 中嶋敏「『宋進士題名録と同年小録』追論」注(一)（『東洋史学論集』続編）汲古書院 二〇〇二年 初出『汲古』二七 一九九五年）に疑問が提示されている。
- (3) 以下、壁の記事は、劉岳申「廣西宣慰公文墓誌銘」（『申齋集』十四庫全書本ならびに校勘の施された『全元文』六七二に拠る）。

(4) 『研究』は、『文氏通譜』文獻、宣慰公文辭取載の文陞「文氏佛生曠志」に拠り、空坑で母と逃げる途中に死んだとされる佛生は生きていて北に送られる途中、隆興府で天祥の知人に救出されたという。至元二十一年に陞と感激の対面をしたが、その二日後に突然病死している。文天祥は佛生の消息を知らず、混乱の中で死んだと信じていた。

(5) 「…余從今集賢直學士受字都所述家傳、徵余銘。…」とあり、本文のように解した。

(6) 萬斯道「宋季忠義録」一六、九龍眞逸「宋東莞遺民録」下 参照。

(7) 熊飛等編『文天祥全集』（一九八七年 江西人民出版社）十八拾遺の獄中家書に「信国公批付男陞」として収録。典拠は道光二十五年文柱刻『重刊文信国公全集』。

(8) 『寶祐四年登科録』、吳自牧『夢梁録』三 士人赴殿試唱名、同書 梅原郁訳注（二〇〇〇年 平凡社 東洋文庫）。

(9) 以下は、鄧光薦「文丞相督府忠義傳」（『文天祥全集』一九 附録一）陳繼周に拠る。

(10) 王瑞來氏は『宋季三朝政要箋證』（二〇一〇年 中華書局）四一六頁において、この記事は、元劉一清撰『錢塘遺事』八 文天祥入衛と同じ史料に由来すると述べる。光緒十三年刊本影印『武林掌故叢編』第一二集では、この部分が「乙亥四月、文天祥爲江西提刑、募兵於贛州。台州杜澹糾合四千人、從之。至九月、天祥將吉贛民人及峒丁二萬人入衛。衣裝器械戈甲精明、人心喜慰」とある。後に述べるように、この記述が正しいが杜澹の合流は翌年である。

(11) 南宋の対金戦争における民間武装勢力については、黄竟重氏に代表される多くの研究がある。同氏『南宋地方武力—地方軍與民間自衛武力的探討』第二章 福建左翼軍（二〇〇二年 東大図書公司）に引く知泉州田真子の事例は、個人・家族・地域の利害から元に投じた蒲壽庚側につき、宋室や抗元勢力と戦ったケースであるが、田真子が文天祥と同じ寶祐四年第一甲第八人の進士及第者であることは興味深い。

(12) 京官である宣教郎に「改め」られたとあるので、杜諱はすでに何らかの官位を有していたのであろう。杜範の甥として恩蔭によって選人か下級武官の位を得ていた可能性が大きい。とすれば本伝がいう「縣宰」であったとしてもおかしくない。

(13) 「指南録」三踏路難。天祥は「京口無城、通衢多隘」と記し、嘉定「鎮江志」二 城池には「羅城周迴二十六里十七步、高九尺五寸。今頽圯」とあるので、このときも城壁は修理されていなかったであろう。

(14) 予詣北營、辭色慷慨。初見大酋伯顔、語之云、「講解一段、乃前宰相首尾、非予所與知。今大皇以予爲相、予不敢拜。先來軍前商量。」伯顔云「丞相來勾當大事。說得是。」予云「本朝承帝王正統、衣冠禮樂之所在。北朝欲以爲國賊。欲毀其社稷。」大酋以虜詔爲解說謂「社稷必不動、百姓必不殺。」予謂「爾、前後約吾使、多失信。今兩國丞相親定盟好、宜退兵平江或嘉興。俟講解之說達北朝、看區處如何。却續議之」。時兵已臨京城、紆急之策、惟有欵北、以爲後圖。故云爾。予與之辨難甚至、云、「能如予說、兩國成好幸甚。不然、南北兵禍未已、非爾利也」。北辭漸不遜。予謂、吾南朝狀元宰相、但欠一死報國。刀鋸鼎鑊、非所懼也。大酋爲之辭屈、而不敢怒。諸酋相顧動色、稱爲丈夫。是晚、諸酋議良久、忽留予營中。當時覺北未敢大肆無狀、及予既繫維、賈餘慶以逢迎繼之、而國事遂不可收拾。痛哉、痛哉。

(15) この降表を持参した柳岳ら祈請使は大都に向かう途中高郵稽家庄で稽聳によって殺害された(『宋季三朝政要箋證』五)。宋側は最後まで封建臣下としての領土と祖先祭祀の継続を要求している。この間の宋廷が元軍に派遣した使者の時期については史料によって相違がある。柳岳ら祈請使殺害年月の異同や伯姪関係・歳幣納入の提示は陸秀夫らの使節によって行われたが『元史』伯顔伝は至元十二年(徳祐元年)十二月庚申とし、『宋史』四七 瀛国公は徳祐二年正月一日とするなどである。しばらく後考を待つ。(16) 劉「伝」は二月十四日に繫年するが、「紀年録」と、そこに引用される鄧光薦「丞相傳」は三月十四日とする。

(17) 博羅と表記され、この時期に丞相であった人物は未詳。博羅の父、博羅歛(一一三九—一一三〇)か？  
(18) 富谷至『中国義士伝 節義に殉ず』(中公新書 二〇二一年)は、中国史の広い視野から漢の蘇武、唐の顔真卿と状元宰相文天祥の節義を比較していて有用である。

つまるところ文天祥は何のために死んだのか？

